

良い子のおもちゃ

小桜 陰子

桜のつぼみが今にも咲きそうなほど膨れていた。梅は一足速く小さな白い花を咲かせていた。

この二種類の樹木を尻目に、家の中では高原理緒がもうすぐ来る春に心躍らせていた。

「うん、やっぱりかわいい。よかったあ、森川学園に入学できて」

彼女がうつとりと見ていたのは、森川学園の制服である。紺色のセーラー服に緑色のスカーフを巻くだけのシンプルなつくりの制服だ。が、どうしてかこの組み合わせはいつの時代でもかわいく通用するのだ。

「ローファーもあるし、紺ソクもあることだし、ちょっと着てみよう」と

入学すれば否応にも毎日着ることになる制服に、彼女は初めて袖を通した。今までは年上の女子高生たちがかつこよく着こなしていた制服。今までの田舎臭い中学校の制服とはおさらばするのだ。

しかしいざ鏡の前に立つと、そこには中学生の芋臭さが抜けきらない自分が、森川学園の制服を着ているだけだった。あの女子高生たちのように、すんなりと制服は自分に馴染まないのか。はあ、とため息をつきながらまたチラツと鏡を見してみる。かわいい制服がまだ馴染まない自分に失望しつつも、これから始まる高校生活を、馴染んだ制服で楽しんでいく自分を思い描いていた。

その時、鏡の横にある箆笥の上に、お菓子の箱が置いてあるのが気になった。今までなら気にしていなかったことだろう。しかし届いたばかりの制服を着て、まっさらな気持ちになっている今の理緒には、目に入るものが、えらく新鮮に映るのだ。

台所から椅子を持ち出し、箱を下ろしてみた。

それはけっこう大きな箱だった。白かったであろう表面は、埃がこびりついてすっかりみすばらしくなっている。動かすと、ずしりと重さが伝わったので、きつと何かが入っているのだろう。理緒はその箱を開けた。

中に入っていたのは子どもの頃遊んだ着せ替え人形とその洋服だった。服のデザインが当時の流行を反映し

ている。

「懐かしー。このリカちゃんも美緒姉ちゃんからでしょ、こっちのイズミちゃん人形は奈緒姉ちゃんから貰ったんだっけ」

二体の人形は、手垢で汚れており、髪も梳かされすぎたせいでうっすらと禿げ上がっていた。メイクを施されて失敗した顔面が妙に痛々しい。

「あと、これは……」

箱の一番下から出てきたのは、一体の人形だった。リカちゃんやイズミちゃんのように派手さは全く無い。着せ替え人形にしては珍しい黒髪ストレートを持っており、顔も無表情に近かった。

この名前の思い出せない人形は、理緒の人形だった。年の離れた姉から貰ったものではない、正真正銘の理緒の人形だ。しかし両親に買ってもらったわけではない。人形屋さんから、理緒が自分で買っているのだ。

それは確か小学二年生に上がる前の春休みのことだった。一年生用の黄色いランドセルカバーを外し、初めてのクラス替えでわくわくしていた頃だ。友達も揃いも

揃って旅行やお墓参りのための帰省でいなくなってしまう、理緒は退屈していた日のことだった。

「リカちゃん、リカちゃん、こっちの洋服のほうが似合うんじゃないのかしら？ あらそうね。じゃあ少し着てみるわ」

中学生と高校生の姉二人は昼間から春期講習や模試で家におらず、必然的に理緒は一人遊びをするしかなかった。色とりどりの洋服に不満は全く無かった。けれど、人形に付いた汚れや顔のシミ、はては女の子の人形であるのにできた頭のハゲは、どうしても悲しくなってしまう。友達の持っている可愛らしくて汚れていない綺麗な人形を目にすると特にそうだった。

「新しい人形欲しいなあ。理緒だけのすつごくかわいいお人形さん。髪はさらさらでさ、お姉ちゃんたちが使ってたように、くしゃつただけでハゲないお人形さん。そしてたらさ、いろんな髪型してみるんだ。二つ編みでしょ、おだんごでしょ、あとパーマにもしてみたいなあ」

もし新しい人形を手にしたら、と考えることしか理緒にはできなかった。

リカちゃんの洋服を替えているときだった。家の外から何かの音楽が聞こえた。移動図書館やごみ収集車の音楽ではない。焼き芋屋やわらびもち屋のどこか間の抜けた声でもない。最初は気にも留めなかったが、だんだん自分の家に近づいてくるのがわかった。

音楽は「お猿の籠屋」だった。せわしなく鳴り続ける音楽の合間から低い声で

「人形、人形売ります。人形、人形売ります」

という文句が繰り返された。

理緒は自分の貯金箱を持って、一目散に走り出した。自分のお小遣いでは到底足りないかもしれないけれども、とりあえず見るだけはよいだろう、と考えて。

人形売りは理緒の家から斜め向かいにある公園にいた。理緒と人形売りのほかに公園には誰もいなかった。人形売りは自分の乗っていた自転車の傍らに立っていた。黒い自転車の荷台には、人形が入っているだろう箱が置いてあった。その箱は小さな冷蔵庫のような形をしていた。その上には「お猿の籠屋」を流していたラジカセがちょこんと置いてあった。自転車だけならば、アイ

スキャンディを売っているようにも見える。そして人形売り自身は葬式で着るような真っ黒いスーツを着込み、黒いシルクハットを目元が見えなくらい深くかぶっていた。

「人形、欲しいのかい？」

人形売りは貯金箱を握り締めている理緒に言った。理緒はこくと頷いた。人形売りの口の両端が、上へ歪んだ。笑っているようだが、目が見えていないので表情の真意を掴み取るのは難しい。

「そうかい。じゃあ、どんな人形が欲しいんだい？」

「えっと……うんとかわいいお人形！でもお姉ちゃんたちがくれたリカちゃんやイズミちゃんじゃなくて、もつとかわいいお人形が欲しいの。それで、いくら髪をいじってもハゲない人形が欲しいな」

「そうかい。……じゃあこの人形はどうだろう」

人形売りはそう言っ、荷台の箱から一体の人形を取り出した。腰まである黒髪に、決して媚びた笑顔を見せない人形だった。

「かわいい！これほしいな」

「気に入ってくれてよかった。それじゃあ、それあげようか？」

「え、いいの？ もらっても」

「いいよ。君が一生大事にしてくれるなら、あげるよ」

「本当？ やったあ、ありがとう！」

理緒は人形売りからその人形を貰ったのだった。

その人形が、今理緒の手になっている人形である。

「懐かしいなあ。結局あれから二・三年で遊ばなくなっちゃったけど。でもいくら梳かしても禿げるところか一本たりとも抜けなかつたんだよね。それに色艶も良くなつたし。なんでだつたんだろ。今でもそうなのかな？」

そこで理緒は箱の中に入れていた人形専用の櫛を手に取り、その人形の髪を梳かし始めた。

六年近く梳かしてないとはいえ、その人形はいくら梳かしても全く引つかかることが無かつた。自分の髪よりも軽い力で梳かせることに、いつしか理緒は嫉妬した。

ちよつとした嫉妬だつたのだ。それでいて、ただの興味本位なところでもあつたのだ。理緒は、人形の髪を一本抜いた。

「え……？ 何、これ」

黒髪の先にあつたのは、白い油の塊だつた。いや、それは生き物の毛根であつた。そして人形の毛を抜いた部分は、ほんのり赤くなっている。

「いやだつ……気持ち悪い！」

理緒は畳に向かつて人形をたたきつけた。

「ごきつという音と共に、人形の首は横へ曲がつた。体はこちらへ向けつつも、顔はじつと畳を見つめている。

「気味悪い場を立ち去りたくて、リビングにでも行こうとした。ふすまに手をかけたが、全く開かない。

「えつ？ 何で開かないの？ ちよつと、ねえ！」

その時だつた。記憶の中で流れたあの音楽が聞こえてきたのは、軽やかなテンポでありつつも、どこか暗いメロディを持つ「お猿の籠屋」の音楽だ。だいぶ使われたのだろうが、音質が悪くなり所々音割れしてはいたが、それはあの人形売りの流す音楽だつた。

音楽は、だんだんはつきりしてきた。道を曲がつたりせずに、真直ぐ自分の家に来ているのもわかつた。

公園で聞いた音と同じ位の大きさになったとき、部屋

の前の庭にあるブロック塀や樹木は、綺麗な丸の形になって消えてしまった。風景が丸く開いてしまったといえはよいだろうか。

円の中には、あの日の人形売りが自転車に乗っていた。真っ黒のスーツとシルクハットに、汚れは一切付いていない。人形売りはゆっくり自転車をこぎながら部屋の中へ入ってきた。入り終えると人形売りは自転車から降りて、畳に投げられた人形を手にした。人形の首はぐらぐらと揺れた。

「あーあ、骨を折っちゃって。それに髪の毛は抜けちゃっているし」

いろいろ見終えた後、人形売りは呟いた。

「一生大事にしてくれる、って言っただろう？」

人形売りの顔はいつしか理緒に向けられていた。

「大事にしてくれない子にはこの人形はあげられないなあ。買ってもらわないといけないな」

「や……嫌よ！ 気持ち悪いもの。それに私今そんなにお金持っていないし」

「誰がお金でって言ったのかな？」

人形売りはシルクハットを外した。七三分けの髪型の下にあったのは、真っ赤な二つの穴だった。瞳孔白目の区別無く、ただその穴はぬめぬめと光っていた。理緒はその目から視線を逸らそうとしたが、目どころか全ての筋肉が固まってしまい、動く事ができなかった。やがて手や足の先が冷えていき、体中が安い真珠のように輝きだした。そして人形売りはおるか、目に映るすべての物が大きくなっていった。天井がとてつもなく遠くなくなっていく。視線がどんどん低くなる。

「お買い上げ、ありがとうございました」

人形売りは口の両端を歪ませると、そのまま霧のように消えてしまった。

どのくらいの時間が過ぎたことだろうか。部屋に誰かが近づく音がする。そして、ようやくふすまは開けられた。

「お母さん！」

「あら、ここにもいない。いったい理緒ったらどこに行つたのかしら。なんでもやりっ放しで、まったく。あら、

リカちゃん人形じゃない。懐かしいわ」

母親は畳の上のリカちゃん人形とイズミちゃん人形を拾い上げた。

「置き場所に困るから誰かにあげたいけど、知り合いに小さい子はもういないし、これぐらい汚かったらバザーでも引取ってくれないわ。洋服もどうかしらね。今と昔じゃ全然好みが違うから。あら？この人形はどうしたのかしら」

母親は部屋の端においてあった黒髪の無表情な人形を手にして言った。

「森川学園の制服着てるから、グッズか何かなの？でも表情が何だか怖い。薄気味悪いわね。……捨てましょ」